

The fetal/placental weight ratio is associated with the incidence of atopic dermatitis in female infants during the first 14 months: the Hamamatsu Birth Cohort for Mothers and Children (HBC Study)

著者	松本 雅子
発行年	2020-06-19
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/00003733">http://hdl.handle.net/10271/00003733</a>

## 論文審査の結果の要旨

アトピー性皮膚炎の発症について遺伝や乳児期の環境、子宮内環境との関連が数多く報告されているが、胎盤因子との関連の報告はされていない。また、アレルギー性疾患の発症に関連する胎盤遺伝子の発現が性間で異なるという報告がある。そこで、申請者らは、胎盤因子が性特異的に乳幼児期のアトピー性皮膚炎の発症と関連しているかについて検討を行った。

対象は、浜松母と子の出生コホート研究（HBC Study）による 2007～2011 年に分娩された新生児のうち、月齢 14 か月の時点までにアトピー性皮膚炎と診断されたか否かのデータのある 922 人（女兒 462 人、男児 460 人）である。ロジスティック回帰分析によるアトピー性皮膚炎発症に関連する因子の分析等を行った。

その結果、胎児胎盤重量比は女兒においてアトピー性皮膚炎の発症に有意な関連がみられた（オッズ比= 1.68、 $p = 0.008$ ）。また、交絡因子を調整した多変量解析においても同様の結果であった。一方で、男児においては、そのような関連はみられなかった。また、他の胎盤因子、母体因子および周産期因子はアトピー性皮膚炎の発症と有意な関連はみられなかった。

この結果から、比較的小さな胎盤が胎児を大きく発育させるための環境を維持する過程で、胎児—胎盤間に出生後のアトピー性皮膚炎の発症をプログラムする何らかの免疫学的あるいは内分泌学的な変化がもたらされている可能性が示唆された。

審査委員会では、申請者らが女兒においてのみ胎児胎盤重量比とアトピー性皮膚炎の発症が関連していることを初めて明らかにしたことを高く評価した。以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 尾島 俊之

副査 緒方 勤

副査 藤山 俊晴